



PLAN2025

プラン 2025

飲料用紙パック
リサイクル行動計画

2021 年 4 月
全国牛乳容器環境協議会

はじめに

私たちは、地球温暖化や資源の枯渇、生物多様性の減少、廃棄物の適正処理など、様々な問題に直面しています。紙パックはこれらの問題に与える影響が小さい容器であるとしても、持続可能な社会の達成に向けて、できる限りの貢献をしなければなりません。

全国牛乳容器環境協議会（以下、容環協）が加入している飲料用紙容器リサイクル協議会では、2006年に飲料用紙パックの3R推進のための自主行動計画を策定しました。その後、容環協は、2010年を目標年度とした行動計画「プラン2010」を策定、以後、5年ごとに中期計画「プラン2015」、「プラン2020」を策定し、様々な活動を展開してきました。

「プラン」に基づいた活動により、紙パックのリサイクルを通しての環境教育などを含めて、環境負荷削減に一定の成果を挙げることができました。しかし、飲料用紙パックの回収率はここにきて減少傾向にあり、回収率向上に向けた新たな活動が求められています。

この度、容環協は、これまでの活動とその評価を踏まえて、2021年度から2025年度までの5年間を対象とした新たな行動計画「プラン2025」を策定しました。本行動計画では、「紙パックの回収率50%を目標とする諸活動を通して、持続可能な社会づくりに貢献する」ことを目的にしました。毎年の具体的な諸活動は本行動計画に基づいた年次計画により実践していきます。

目標達成に向けての活動は、容環協にとっての社会的責務であり、本行動計画はそのための社会的な説明責任でもあると認識しています。また、計画の策定にあたっては、容環協内にワーキンググループを設け、十数回の会議を開催し、関係する皆さまから多くの知恵をいただきました。今後とも計画の実現に向けて、紙パックのリサイクルに関わる皆さま方のご協力とご支援をお願い申し上げます。

2021年4月

全国牛乳容器環境協議会

I	行動計画の基本的事項	1
1	目的	1
2	位置づけ	1
3	体系	2
II	現状認識	3
1	飲料用紙パックと暮らし	3
2	紙パックの環境特性	4
3	紙パックのリサイクル	5
4	持続可能な社会に向けての動き	8
5	プラン 2020 の成果と課題	10
5.1	プラン 2020 の成果	10
5.2	プラン 2020 の課題	11
III	行動計画	13
1	紙パックリサイクルの現状把握、 ステークホルダーとのコミュニケーション	13
1.1	意見交換会の開催	13
1.2	再生紙メーカーとの対話	14
1.3	他団体との連携	14
2	回収率向上のための啓発	15
2.1	市民との対面による啓発活動	15
2.2	様々な媒体を通じた啓発活動	16
2.3	環境リーダーの活動支援	16
3	紙パックの回収・再生インフラの整備支援	17
3.1	回収場所の情報整備と提供	17
3.2	回収力の弱い地域の回収ルート構築支援	17
3.3	地域に即した支援や情報提供	18
4	次世代を担う子どもたちの環境マインド向上	19
4.1	環境教育活動	19
4.2	学乳パックリサイクルの促進	19
5	活動への理解促進、活動の公表と評価	20
IV	計画の実現に向けて	21

I

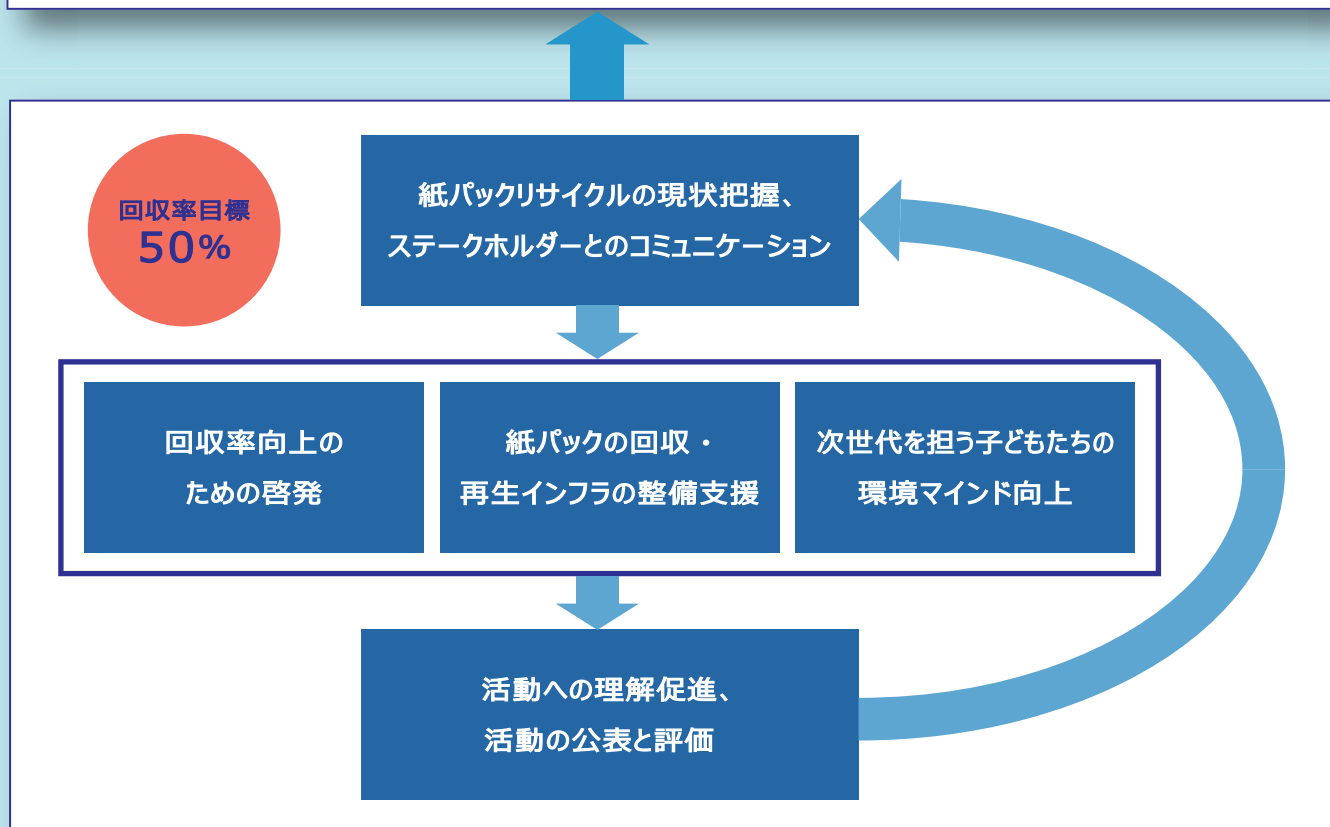
行動計画の基本的事項

1 目的

- 紙パックの回収率 50%を目標とする諸活動を通して、持続可能な社会づくりに貢献します。

紙パックを通じて持続可能な社会づくりに貢献する

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



2 位置づけ

- 本行動計画は、2021 年度から 2025 年度までの 5 年間の中期計画として策定します。
- 毎年度の活動は、本行動計画に基づいた年次計画により実践します。

3 体系

―― 回収率目標 50%達成に向け、5 本の柱で活動を実施します。

1.

紙パックリサイクルの現状把握、ステークホルダーとのコミュニケーション

目的：ステークホルダーの意見を聞くことなどを通し、正しく実態を把握する

2.

回収率向上のための啓発

目的：市民・企業等へ紙パックの特性を正しく伝え、リサイクル行動へつなげる

3.

紙パックの回収・再生インフラの整備支援

目的：日本全国どこでも誰でもが紙パックをリサイクルできるルートの整備を支援する

4.

次世代を担う子どもたちの環境マインド向上

目的：持続可能な回収力向上のため、子どもたちの紙パックへの理解を深める

5.

活動への理解促進、活動の公表と評価

目的：活動をレビューするとともに、公表しステークホルダーの共感を得る

Ⅱ

現状認識

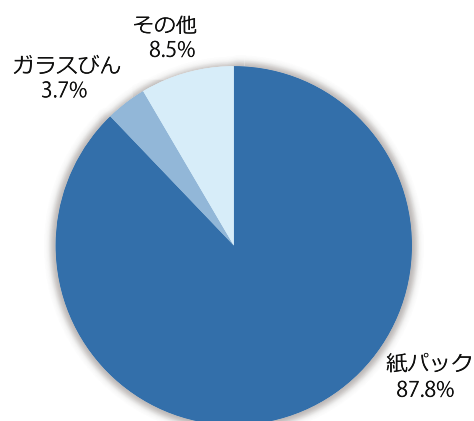
7 飲料用紙パックと暮らし

1.1 飲料容器の中での紙パック

半世紀前の第1回東京オリンピックが開催された1964年に、紙パックの代表ともいえる屋根型紙パック入り飲料が市場に登場しました。軽くて丈夫、食品の安全・安心面からも高機能だった紙パック入り飲料は、牛乳を中心に、その後の日本の高度成長と歩を合わせ、暮らしに広く浸透していきました。現在では牛乳のほかジュース・お茶やアルコール飲料などいろいろな飲料の容器として広く使われています。なかでも牛乳や加工乳の容器はその約88%を紙パックが占めています。

牛乳はまた学校給食と縁の深い飲料です。その学校給食用牛乳（学乳）に限ると、2019年度では約85%が紙パックで供給されており、その比率は年々増加しています。¹

牛乳容器に占める紙パックの比率
(容量ベース)



出典：農林水産省「2019年10月 牛乳乳製品統計」より作成
牛乳、加工乳、成分調整牛乳の合計

1.2 飲料用紙パックの使用量

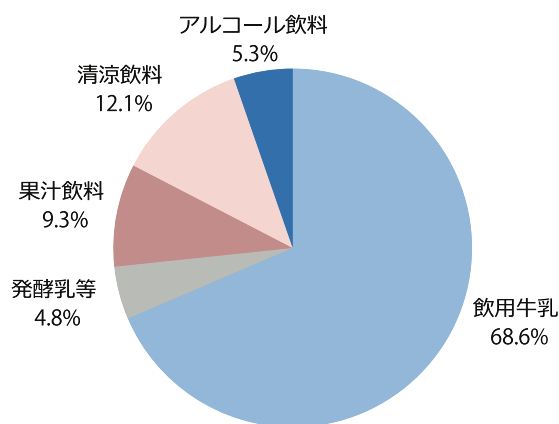
2020年度の基本調査²によれば、2019年度は、数量では約81億個、重量では約18万7千トンの紙パックが飲料容器として使用されました。中身飲料の量では約560万キロリットルになります。1人あたりでみれば、6日で1パック、1週間強で1リットル飲まれています。

1人あたりの飲料用紙パック使用量 (2019年度)

	年間	1日あたり
重量	1.5kg	4.0g
数量	64パック	0.17パック
中身飲料の量	44リットル	121ml

出典：2020年度基本調査より推計

中身飲料別の飲料用紙パック使用重量比率 (2019年度)



出典：2020年度基本調査

¹ 農林水産省「学校給食用牛乳供給事業概況」(2020)

² 全国牛乳容器環境協議会/エコイプス「2020年度飲料用紙容器リサイクルの現状と動向に関する基本調査報告書《2019年度 紙パックリサイクルの実態》」(2020)

2 紙パックの環境特性

たくさんの紙パックが生活に溶け込んでいる今ですが、優れた環境特性を持っていることに着目すべきでしょう。

2.1 ライフサイクルを通じた環境負荷とリサイクルの効果

紙パックは容器自体の重量が軽いことから輸送効率が高く、店舗などの小売においては効率よく陳列することが可能です。さらに、飲み終わった後の紙パックを廃棄せずに回収することで、トイレットペーパーなどにリサイクルすることができます。

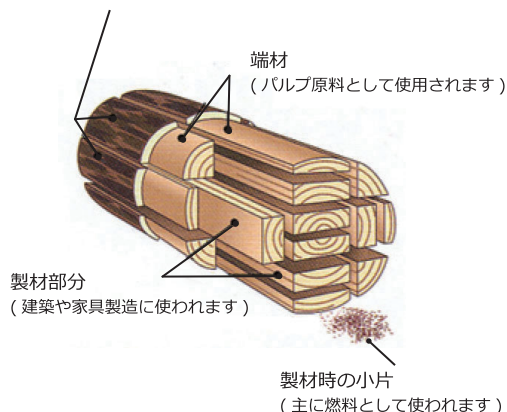
製品やサービスの原材料調達から、製造・流通、リサイクル・廃棄に至るまでの一連のライフサイクルにおける環境負荷を定量的に算定する手法として、ライフサイクルアセスメント（Life Cycle Assessment：LCA）があります。紙パックを対象に実施された LCA 調査³からは、1000ml の紙パックでは、製造や加工に必要な原材料の 80%以上、エネルギーは約 50%が再生可能なバイオマス資源を使用していることが分かっています。

また、同調査によると、屋根型 1000ml の CO₂ 排出量はごみとして焼却した場合は 38.1g-CO₂ ですが、リサイクルすると 23.4g-CO₂ 削減されて 14.7g-CO₂ となります。

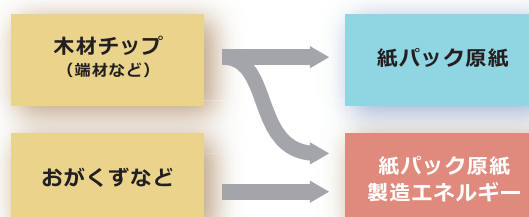
2.2 持続可能な森林の再生可能資源を有効に活用

紙パックの原料に使用されているパルプは、主に「採種→育苗→植林→育成→伐採」というループの森林管理が行われている北米・北欧の針葉樹から作られます。これらの森林の多くは第三者機関が認定する FSC や PEFC などの「持続可能な森林認証」を取得していますが、認証されるためには土壌、水、動植物を含め、森林全体が共存・共生できる森林管理がなされていなければなりません。何十年という長い周期で再生される森林は、原生林の減少を食い止め、CO₂ 吸収・削減にも寄与しています。

皮部分
(主に燃料として使われます)



紙パック製造に使用されるバイオマス資源



³ 環境省請負調査/財団法人政策科学研究所「平成16年度容器包装ライフ・サイクル・アセスメントに係る調査事業報告書」(2005)

伐採された木は、主として建材や家具の用材となり、用材に適さない端材や間伐材などが木材チップに加工され、そこから取られた繊維分が紙パック原紙に使われます。それ以外の残った部分は原紙製造の際の熱エネルギーとなります。紙パックは木というバイオマス資源を最大限有効に活用して作られているのです。木は光合成により大気中の CO₂ を吸収して成長するので、紙パックを燃やしたとしても、もともと大気中にあった CO₂ がもとの大気に戻ることであり、総量としての CO₂ 濃度は変わらないと見なせます。

2.3 使用後はリサイクルして新たな製品に

紙パックには飲料容器としての強度保持のため、繊維が太くて長い針葉樹のパルプが主に使われています。この太くて長い繊維からできたパルプは、高品質なためバージンパルプの代わりとして、トイレトペーパーやティシュペーパーなどの家庭紙には最適とされています。1000mlの紙パック約6枚で1ロールのトイレトペーパーを作ることができます。

3 紙パックのリサイクル

3.1 使い捨てからリサイクルへ、受け継がれる「もったいない」の気持ち

当初は使い捨てられていた紙パックですが、1984年「ものの大切さを子どもたちに伝えたい」と主婦グループが始めた牛乳パックの再利用運動を契機に、紙パックリサイクルとして広がり、市民団体・企業・自治体などが参画する社会システムとして定着していきます。

他容器のリサイクルと異なるのは、紙パックのリサイクルが市民の思いと運動から始まったことでしょう。全国牛乳パックの再利用を考える連絡会初代代表の平井初美さんは、「この運動は牛乳パックの回収量やリサイクルルートの確立を到達点として考えるのではなく、自らの生き方、暮らし方を問うことが第一義」と語っています。その思いは、現在の紙パックリサイクルにも脈々と流れています。

全国牛乳容器環境協議会も 1992 年に設立されました。なお 1995 年に制定された容器包装リサイクル法で飲料用紙容器は分別収集の 1 品目として挙げられました。

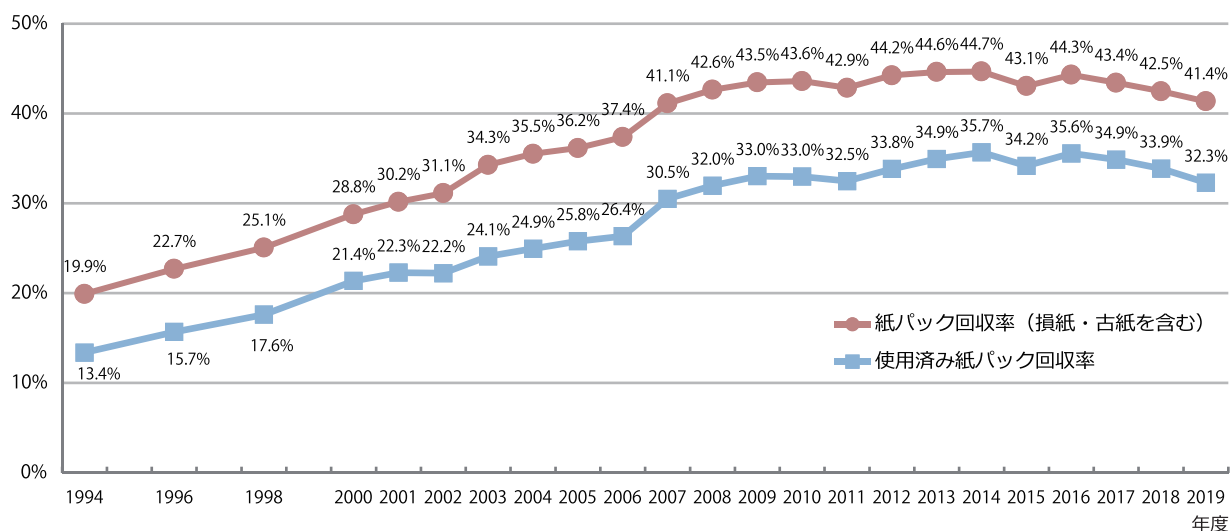
子どもにとって紙パックは、ごみの減量や資源の有効利用を学べる身近な素材です。飲み終わった紙パックを「洗って、開いて、乾かして」回収に出すことで資源としての価値が生まれ、トイレトペーパーなどにリサイクルされることを学びます。その学びは、木材や森林を取り巻く生態系・環境保全や限りある資源の循環について関心を持ち、理解するきっかけになるでしょう。

子どもだけでなく、身近な紙パックのリサイクルによって、ふだんから環境問題を意識して行動する人が増えることも期待しています。

3.2 紙パックリサイクルの現状

紙パックのリサイクルは、紙パックメーカーの損紙や飲料メーカーの損紙・古紙の回収と、市場に出てからの使用済み紙パックの回収の2つに分けられます。前者は、ほぼ全てリサイクルされています。後者はこのところ回収が進んでおらず、未だに3分の1程度の回収にとどまっています。

紙パック回収率の推移



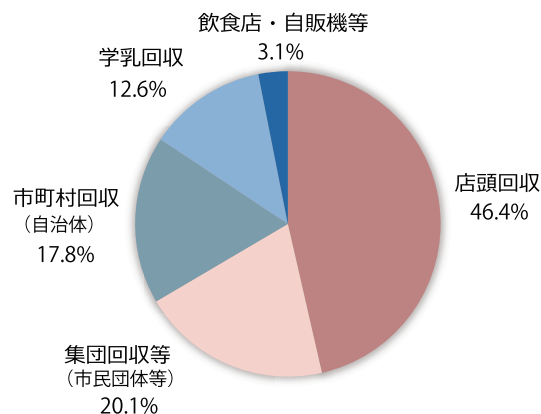
出典：2020年度基本調査

3.3 多様な回収ルートと役割分担

紙パックの回収ルートは多様ですが、最も回収量が多いのは、スーパーマーケットなどでの店頭回収です。現在、スーパーマーケットの店頭では多くの資源回収が行われるようになってきていますが、紙パックの回収運動の広がりを受けて1980年代後半から紙パックを対象として実施されるようになったのが、店頭回収の始まりと言われています。

市民団体などによる集団回収も主要回収ルートの一つです。紙パックリサイクルを開始した当時、思いを共有した多くの市民グループが紙パックの回収に深く関わりました。福祉施設などの団体もリサイクルに協力しました。最近で

使用済み紙パックの回収ルート別回収量の比率（2019年度）



出典：2020年度基本調査

は古紙原料問屋等による回収も増えています。紙パックは、様々な民間主導による回収に多くを支えられ今日まで広がったのです。

また、市町村による回収や、学校給食や外食産業など店舗からの回収もあります。このように、紙パックの回収は多様なルートが併存しています。

これらの回収ルートが有効に機能するためには、それぞれが必要な役割を果たすことが必要です。市民や使用事業者は適切に分別し、市民団体なども回収活動に関わり、市町村や古紙原料問屋などは集まった紙パックを分別・回収し、再生紙メーカーなどの再生事業者は再商品化します。

そして、資源が確実に循環していくためには、これらの役割分担に加え、再商品化されたものがより多くの人に使用されることも不可欠です。

3.4 収集・選別システムの特徴

紙パックは、紙の両面にポリエチレンを使用しているので、リサイクルのためにはポリエチレンと紙を分離する工程が必要です。国内には多くの古紙再生工場がありますが、ポリエチレンを分離し紙パックをリサイクルできる工場は限られています。新聞や雑誌をリサイクルできる工場であっても、ポリエチレンを分離する設備のない工場では、紙パックはリサイクルできず、廃棄物となってしまいます。

また、古紙の品質や特徴に応じ再生される製品が異なります。例えば、新聞は新聞紙や雑誌用の紙などに、また紙パックは、先に述べたように、良質な家庭紙としてリサイクルされます。紙パックは他の古紙と分けて集めることで、その特性を生かしたより高度なリサイクルができることとなります。紙パックの出荷量が年間 20 万トン程度と紙・板紙の全体量に比べて少ないことから、紙パックと他の古紙とをきちんと分けて出すことが紙パックリサイクルの質の向上にとって重要な課題です。

3.5 地域による回収率の差

全国の回収状況を見ると、地域で大きな差がみられます。概して北海道や関東、中部などで回収率が高くなっています。この背景には、当初の牛乳パックリサイクル活動の濃淡や、紙パックを扱う再生紙メーカーが地域的に限られていたことがあるのかもしれませんが、紙パックを回収している古紙原料問屋や再生紙メーカーは増えてきていますが、まだ全国どこからでも紙パックを回収できるルートがあるとは言えない状況です。

4 持続可能な社会に向けての動き

4.1 SDGs (Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標)

プラン 2020 の期間である 2016 年度から 2020 年度までの 5 年間は、世界が持続的に発展していくための目標として 2015 年に定められた SDGs が少しずつ広がってきた時期と重なります。SDGs では 17 の目標と 169 のターゲットが定められており、紙パックのリサイクルはこれらのものと関係があります。

飲み終わった紙パックをリサイクルすることは、廃棄物の発生を減らすことにより、「**12** つくる責任 つかう責任」と関わっています。前に述べたように、紙パックの原料に使用されているパルプは主に持続可能な森林管理が行われている針葉樹から作られており、「**15** 陸の豊かさを守ろう」と深い関わりがあります。また近年プラスチックは、海洋生物の生態系に影響を及ぼしているとして注目を集めています。多くの国が使用制限に動かなか、日本でも 2019 年にプラスチック資源循環戦略が定められました。紙パックを適切に回収・リサイクルし散乱を防ぐことも「**14** 海の豊かさを守ろう」にもつながると考えています。



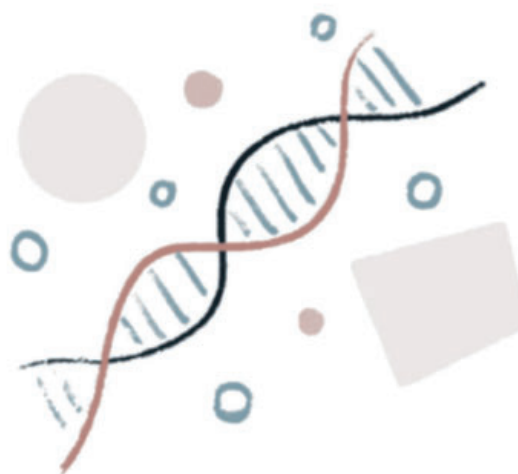
前に示した LCA 調査によれば、紙パックをごみとして出すときよりもリサイクルするときの方が CO₂ の排出量が少ないことが示されています。また、紙パックの多層構造の改良により品質保持期間を長くすることによって食品ロスが削減できるなど、紙パックはさまざまな環境問題と密接に関係しています。

その一方で、リサイクルの現場では、世界の古紙や廃プラの処理で多くを担っていた中国が 2017 年末以降、自国内の環境悪化を理由に段階的に輸入禁止を進めたことなどにより、国内の紙パックのリサイクルでも、古紙価格の低下やラミネートプラスチックの処理コストの上昇などの影響を受けていることにも注意が必要です。

4.2 新型コロナウイルス感染症と新しい生活

世界保健機関（WHO）が新型コロナウイルス（COVID-19）についてパンデミックという認識を示したのは 2020 年 3 月でした。その後、同感染症は瞬く間に世界に広がり、2021 年に入っても感染は拡大が続いています。各国が採用した代表的な対策の一つが「対象エリアの住民の活動を制限する」というロックダウンです。日本でも 2020 年 4 月と 2021 年 1 月に「緊急事態宣言」が出されました。この宣言をはじめとし、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の一斉休校、企業におけるテレワークの推進やオンライン会議の実施、イベントの中止、飲食店等の営業時間短縮など、これまでの生活が一変することになりました。これらの変化の一部は、いわゆるアフターコロナと呼ばれる時代においても、定着する可能性があります。また、感染拡大防止と経済活動の継続とのバランスをどのようにとるべきかという難しい課題にも直面し、経済、社会、環境の持続可能性について改めて考える機会にもなりました。

UNDP（国連開発計画）によれば、二重らせんのように、SDGs と新型コロナウイルス危機への対応は絡み合っており、断片的なアプローチで取り組むことはできません。紙パックのリサイクルも、この二重らせんを念頭において考える必要があります。「もったいない」ということにとどまらず、持続可能な社会を形成するためにも、より一層のリサイクル推進が求められています。



” 新型コロナウイルスと SDGs ” UNDP より
<https://feature.undp.org/covid-19-and-the-sdgs/>

5 プラン 2020 の成果と課題

プラン 2020 は、前に述べたように SDGs が理解され少しずつ広がってきた時期と重なります。SDGs では資源を採掘して作って捨てるという直線型の経済から資源を循環させて使う循環型経済への転換が持続可能な発展のための一つの鍵とされました。また、2019 年にはプラスチック資源循環戦略が定められ、レジ袋の有料義務化など具体的な施策も動き出しています。一方で、市民レベルでの資源循環への関心は、大きなうねりとはなっていないように思われます。社会課題の解決という命題に対する関心の高まりはあるものの、様々な社会課題が顕在化していく中、関心事項の分散が起きているのかもしれません。

5.1 プラン 2020 の成果

〔1〕回収力を高める場づくり

①ステークホルダーとの意見交換会

経済産業省、環境省、農林水産省の3省をはじめ地方自治体、関連団体、紙パックメーカー、乳業メーカー、回収事業者、再生紙メーカー、NPO、一般市民など多くのステークホルダーとの意見交換会を年1回開催しました。容環協からは活動の紹介をし、さまざまな立場の関係者から意見をいただき、当協議会の活動に反映させました。具体的には、廃プラ残渣処理や、資源の国内循環などについて意見を交換してきました。

②地域会議

紙パックの回収率は地域により差があります。地域の回収力向上には、スーパーマーケットなどの小売店や、自治体や地域の古紙回収業者、地域住民の協力が不可欠です。地域会議を開催し、それぞれの地域における特有の課題と解決策を考えてきました。愛知県、東京特別区、京阪神で開催された地域会議では、より実態に即した議論をすることができました。例えば東京特別区では、大型マンション内での自治会による紙パックの回収事例が紹介され、集団回収について意見交換しました。

③地域の環境活動への参加

自治体、市民団体、会社などが開催する様々な環境イベントに参加し、ポスター、パンフレット、アンケート、紙パックから再生されたトイレトペーパー等をセットにした紙パック啓発パッケージを提供しました。

〔2〕様々な生活の場における回収促進

紙パック回収ボックスの配布を継続し、計画期間の配布数は2,000を超える見込みです。また、新たな取組みとしてバスへのラッピング広告や自治体の有料ゴミ袋への啓発広告による市民への協力依頼を行いました。業務用で使われる紙パックの回収を進めるため保育園、コーヒーチェーンなどとの対話や協力も進めました。また、紙パックが雑がみ等として回収されている事例があることから、雑がみ区分で収集されている紙パックの調査を行いました。

〔3〕教育や学習の場における活動の促進

これからの持続可能な社会を担う子どもたちに対し、牛乳パックの環境特性やリサイクル、資源の大切さ、森林管理について様々な啓発活動を展開してきました。小学生を対象とした出前授業は、資源の大切さについて手すきはがき作りを体験しながら学べる機会として児童や教師からも高い評価を得ています。

また、全国の小学校を対象とした「牛乳パックで『遊ぶ学ぶ』コンクール」を実施し、紙パックにしっかりとふれる機会を通じたりサイクルについて考える場を提供してきました。環境教育用ホームページ「牛乳パック探検隊」も充実させ、紙パックのリサイクルを環境教育の素材として定着させてきました。

〔4〕コミュニケーションの充実

毎年の年次報告書の作成・配付のほか、ホームページの更新など紙パックのリサイクルに向けた情報の発信、共有化、紙パックリサイクルの現状と動向に関する基本調査などを通じて、市民の意識・行動の把握と活動への反映を図りました。また、エコプロダクツ展、エコライフフェアなどをはじめとする各種環境イベントに出展参加し、来場者に直接紙パックの回収への協力をお願いや紙パックリサイクルについての意見交換を行いました。

5.2 プラン 2020 の課題

プラン 2020 の期間の中で行った、様々な活動により改善された事項もあるものの、改善が十分に行われなかった事項や意図せず悪化してしまったことなどがありました。特に回収率の低下は、様々な背景があったとはいえ最も大きな課題です。

〔1〕市民に向けた課題

①紙パックが資源であるとの意識が低下傾向です。若年層は SDGs ネイティブといわれるように社会課題には関心が高いけれど、紙パックリサイクルと社会課題が結びついていないと考えられます。紙パックリサイクルが社会課題の解決に貢献することを納得感あるかたちで訴求することが課題です。

②「洗って、開いて、乾かして」ができてにくい場面（屋外飲食など）での処理はどうあるべきかを提示していく必要があります。

③子どもたちへの環境教育は継続的に実施することが望まれます。生活様式の変化を踏まえオンライン授業への転換やその他のデジタルツールへの活用を図っていくことも必要です。

〔2〕地域による回収インフラ、輸送の課題

地域により紙パックの分別区分・回収方法が異なり、結果として地域による回収量に大きな差が生じています。再生紙工場から遠い地域においては輸送費が高いため回収・リサイクルが経済的に合わないことから回収されない、紙パック全体の量が大きくないことから非効率になりがちなこと一因となっています。経済的に合わないため紙パックを他の古紙と分けていない自治体でも回収できるようにする方法について、状況に応じた提案の必要があります。

【3】処理に関する課題

中国の古紙や廃プラ輸入制限以降、ラミネートプラスチックの処理コストが上昇し、国内の紙パック古紙取引価格も低下しています。このことは、再生紙工場の意欲に影響を与えています。また、ラミネート以外のプラスチックの使用も増えており、プラスチックの処理に関する動向を注視する必要があります。

【4】再生品に関する課題

資源循環をスムーズに行うためには再生品が使われることが重要です。紙パックから再生した商品の価値向上、使用促進を図る必要があります。

7 紙パックリサイクルの現状把握、 ステークホルダーとのコミュニケーション

—ステークホルダーの意見を聞くことなどを通し、正しく実態を把握する—

紙パックの回収・リサイクルは市民、自治体、再生紙メーカー、流通、飲料メーカー、容器メーカーなど多くのステークホルダーが協力してはじめて実現します。古紙相場など、紙パックのリサイクルをとりまく状況は時々刻々変化しています。こうした情報を正確にとらえ関連したステークホルダー間で共有し、共通の課題として認識していくことが回収力を強化する上で重要です。従って、紙パック回収活動をステークホルダーが一体となったものとするための情報共有の場を作っていくとともに、容環協の活動についての意見を集約し、以後の活動に役立てていく仕組みを構築します。

KPI

達成指標

容環協活動に対する 評価を向上させる

容環協活動に対するステーク
ホルダー及び自己評価を
上昇させる

※以下は例示であり、実施行動は年次計画で決めていきます。

1.1 意見交換会の開催

毎年1回開催される意見交換会は、中央官庁、地方自治体、関連団体、乳業メーカー、回収事業者、再生紙メーカー、NPO、一般市民など幅広いステークホルダーが一堂に会して、情報を共有する場です。回収率向上に向けた容環協の1年間の取り組みを報告し、動向を共有したうえで、知恵を出し合い今後の活動の方向付けを検討します。開催結果は今後の容環協の活動方針や各ステークホルダーのリサイクル促進活動に活かしていきます。

1.2 再生紙メーカーとの対話

再生紙メーカーは紙パックリサイクルの一つの要であり、回収率 50%に向けて大きな役割を担っています。この再生紙メーカーとのコミュニケーションを深めるために、意見交換会やヒアリング、見学会の開催等を検討します。

意見交換会やヒアリングでは、紙パック古紙資源の需給状況や再生品の市場動向などを取り上げ、得られた成果を今後のリサイクル促進活動に活かしていきます。見学会は、容環協が再生紙メーカーの設備・機器の実態を把握し、より効果的な諸活動へとつなげます。

1.3 他団体との連携

紙パックは牛乳だけでなく他の飲料でも使用されています。既存調査によれば、飲料種類別の回収率は牛乳が高く他飲料は低くなっています。紙パックの回収率を向上させ、50%を達成するためには、牛乳だけでなく他飲料の紙パック回収率も上げる必要があります。飲料用紙パックのリサイクルに関連する各団体とリサイクルの拡大に向けて協議・協調し、回収活動を連携して進めることも検討していきます。

2 回収率向上のための啓発

ー市民・企業等へ紙パックの特性を正しく伝え、リサイクル行動へつなげるー

紙パックの回収は、紙パック飲料の飲用・利用者の協力が不可欠です。これら飲用者等にラミネート紙である紙パックのリサイクルについて正しく理解してもらい、適正排出の協力を依頼していきます。伝達する情報の内容を分かりやすくしていくとともに、一人でも多くの人に紙パックリサイクルに関する情報を届けることを目指します。これまでの活動の中心であった対面による啓発だけでなく、オンラインメディアの活用など種々の方法を模索します。また、地域等でこうした活動を実践している人々との協力関係を築き、情報を拡げていきます。

KPI
達成指標

紙パックリサイクルを
意識して行動する人の
比率を高める
毎年度同じ市民アンケートを
実施し測定する

※以下は例示であり、実施工動は年次計画で決めていきます。

2.1 市民との対面による啓発活動

回収率を上げるためには、使用済み紙パックの9割近くを占める家庭系の回収強化が不可欠です。紙パック回収になじみが薄い市民に紙パックのリサイクルの必要性を納得してもらうためには、どのような視点が必要か直接対話をすることによって気づきを得たいと考えています。また、リサイクルの大切さに気づいた人が、近所の人や友人知人にも伝えていくために必要なことは何かを考えていきたいと思います。

市民との直接対話の場として、環境関連のイベントがあります。歴史も規模も様々ですが、来場者は環境に関心を持つ人が多く、さまざまな意見を得ることが期待できます。大規模なイベントのみならず、地元密着型の環境イベントもあります。

こうした出展イベントを最大限活用していきます。

2.2 様々な媒体を通した啓発活動

「SDGs ネイティブ」などが含まれる若年層は、既存調査で回収率が低いため、この世代を意識した活動と広がりも視野に入れます。

対面による啓発活動だけではなく、様々な媒体、例えば紙パック本体へのメッセージ表示のほか、新たな啓発活動もメニューに加えることも検討していきます。

また、ホームページを活用し、事例紹介など回収・リサイクルの見える化の試みや、さまざまなメディアを活用し若年層に影響力のある情報発信の方法を検討していきます。

2.3 環境リーダーの活動支援

紙パックの特性を正しく伝え、紙パックをリサイクルする人を増やすためには、容環協単独の活動のみならず、各地域の環境リーダーの活躍も欠かせません。ふだんから地域で活躍する環境リーダーが伝えることで、より納得感のあるかたちで紙パックのリサイクルを学べるのが期待できます。環境リーダーとのつながりは、容環協の様々な活動等を通じて、あるいは市民団体等のネットワークを通して生まれます。容環協は、こうした環境リーダーの活動を支援したり、共同で活動したりすることで、啓発活動等を進めることも検討していきます。

3 紙パックの回収・再生インフラの整備支援

—日本全国どこでも誰でもが紙パックをリサイクルできるルートの整備を支援する—

紙パックは、ポリエチレンラミネート紙であり、紙をリサイクルするためにはポリエチレンを分離する必要があります。国内の多くの再生紙工場は、ラミネートの分離工程を持たないので、雑誌や新聞、板紙などの他の古紙と分けて、ラミネート紙に対応できる工場に持ち込む必要があります。しかし現在、日本全国どこからでもこうした工場に持ち込める回収ルートがあるとは言えない状況です。

また、紙パックを使用した市民が排出する拠点の数も地域によって濃淡があり、「紙パックをリサイクルしたいがどこに持っていったらよいのかわからない」という問い合わせが容環協にあります。どこからでも紙パックのリサイクルに協力できるよう紙パックの回収困難地域の解消を目指し、情報収集や発信などを行っていきます。

KPI
達成指標

**回収インフラが未整備の
自治体を減らす**

基本調査から行政及び店頭の
回収拠点の数を把握する

※以下は例示であり、実施工動は年次計画で決めていきます。

3.1 回収場所の情報整備と提供

紙パック回収にかかる情報収集を行い、求められている情報を提供できるようにします。例えば、紙パックを取り扱う古紙原料問屋等のデータ整備を検討します。分別収集未実施の市区町村等は、拠点回収や店頭回収スーパーマーケットの情報の整備を検討します。これらの情報は、容環協への問い合わせへの回答とともに、回収ルート構築支援等に活用が期待できます。

3.2 回収力の弱い地域の回収ルート構築支援

回収力が弱い地域は、多くの場合、回収のインフラに問題を抱えています。例えば古紙の回収システムがあっても紙パックは対象外という地域では、紙パックを扱う古紙原料問屋がないことが考えられます。回収システムの課題を整理し、その改善を支援します。

3.3 地域に即した支援や情報提供

紙パックの回収は、地域によって再生事業者までの距離や市区町村の回収方法などが多様であり、回収率を上げるための課題も地域で異なっています。各々の課題解決に向けて、実態を把握し、地域特性に合わせた支援や情報提供の手段を検討していきます。

4 次世代を担う子どもたちの環境マインド向上

—持続可能な回収力向上のため、子どもたちの紙パックへの理解を深める—

子どもたちにとって紙パックは、身近な環境教育の教材です。紙パックを通して資源循環などの環境問題を考え、体験する機会を持つことで、環境に配慮した行動ができる大人になることを期待します。こうした紙パックを通した環境教育の支援を行い、環境問題に関心を持つ世代が増えていくことが将来の紙パックの回収・リサイクルにつながっていくと考えます。

KPI

達成指標

学乳パックの回収率を
向上させる

学乳紙パック回収率は
基本調査から得られる
比率を用いる

※以下は例示であり、実施行動は年次計画で決めていきます。

4.1 環境教育活動

子どもたちに、身近な学乳パックを題材とすることで、リサイクルを自分の問題として感じてもらうとともに、資源循環や環境問題、SDGs について考えるきっかけになるよう、プログラムを検討します。子どもたちが日常生活のなかで率先して紙パックの回収を行うようになれば現在の紙パック回収率向上にもつながり、いまの子どもたちが、将来、紙パックのリサイクルだけでなく幅広い視野で環境問題、社会問題を意識して行動できる大人になることが期待できます。

4.2 学乳パックリサイクルの促進

学乳パックの回収は独自回収への移行が進んでいますが、学校における処理ではリサイクルされずに廃棄されるものも少なくありません。そこで、各学校が学乳パックをリサイクルできるように、各地域の回収事業者等の情報の提供など、学校が紙パック回収を進めやすい環境を整えとともに支援していきます。

5 活動への理解促進、活動の公表と評価

ー活動をレビューするとともに、公表しステークホルダーの共感を得るー

容環協の活動を定期的に振り返り、目的に近づいているかを評価確認するとともに、活動の成果を公表していきます。こうした振り返りを通して、活動の中で効果があったものと効果が薄かったものを整理し、次年度の活動を修正していきます。

KPI
達成指標

**容環協活動に対する
評価を向上させる**

容環協活動に対するステーク
ホルダー及び自己評価を
上昇させる

※以下は例示であり、実施行動は年次計画で決めていきます。

関係者へ容環協の活動の認知と共感を得ることを目的に、年次報告書を作成します。作成にあたっては、回収率 50%に向けた活動のレビュー及び読者から多くの反応が得られることを意識します。また、紙パックの回収やリサイクルに関して実施した調査結果等を公表し、紙パック回収の実態および課題の共有を目指します。

IV

計画の実現に向けて

① 行動計画の性格

本行動計画は、容環協が作成したものであり、容環協が主体者です。容環協が一つの核となって計画の実現を目指します。しかし本行動計画は様々な関係者の積極的な関与と行動を前提にしています。本行動計画は、容環協の計画であると同時に、関係者との連携を前提とした社会的な計画の性格を併せ持っています。

② 容環協の役割

容環協は、自らが率先して事業を展開するとともに、行動計画の進捗状況を数値化することによって把握し、進行管理を行います。これらの進捗状況を踏まえて単年度の事業計画を作成し、効率的・効果的に事業を推進していきます。単年度の事業計画策定に当たっては、先例にとられることなく実施事業の見直しを行い、柔軟かつ適切に対応します。

③ 紙パックメーカーや飲料メーカーの役割

紙パックメーカーや飲料メーカーなど会員企業も行動の核となる役割を果たします。各事業の実践、とりわけ地域における諸活動は、地元とのつながりが強いメーカーほど力を発揮できます。活動の実践を通してさらにつながりを深めていく好循環を目指します。

④ 多くの関係者の力と創意工夫

本行動計画は、紙パックメーカーや乳業メーカーだけでなく、市民団体、学校や地域コミュニティ、回収業者、古紙原料問屋、再生紙メーカー、国や市区町村といった様々な関係者の力や創意工夫を凝らした活動、協力によって実現します。容環協は、このような活動を支援するとともに、関係者の連携が円滑に機能するよう調整していきます。

⑤ ネットワークの強化

本行動計画の実現に向けて、様々な関係者とのネットワークを強化していきます。牛乳や清涼飲料、酒類、紙パックメーカーなどの業界団体、紙パックや他の容器リサイクルに関わる各団体等と対話を重ねることにより、回収率向上に向けた連携をさらに進めていきます。

●本行動計画は、国、市区町村、民間事業者、市民団体などが参加した「飲料用紙パックのリサイクル促進意見交換会」や、市民アンケート調査、各種調査に関わったシンクタンクなどとの意見交換なども踏まえて、容環協総務委員会、プラン 2025 作業グループ（WG）がとりまとめました。

■全国牛乳容器環境協議会 総務委員会（※WG はプラン 2025 作業グループメンバー（2021 年 3 月 31 日現在）

齋藤 明敏	（株）明治 サステナビリティ推進部 推進グループ長 ※WG（リーダー）
森 哲志	森永乳業（株）コーポレート本部 CSR 推進部 環境対策グループ長 ※WG
和田 玲司	雪印メグミルク（株）CSR 部 CSR 推進グループ担当課長 ※WG
加藤 佳弘	協同乳業（株）環境対策室
山本 京子	江崎グリコ（株）グループ渉外部 課長
金崎 誠一	日本製紙（株）紙パック技術統括部 主席技術調査役 ※WG（サブリーダー）
柳瀬 祐子	日本テトラパック（株）サステナビリティ部エキスパート ※WG
杉山 信行	凸版印刷（株）生活・産業事業本部 パッケージソリューション事業部 販売促進本部 GL 販促 担当部長
小林 久子	北越パッケージ（株）営業本部 包装営業グループ 液体容器営業部 担当課長（兼）事業・技術 開発室 課長

■事務局

遠藤 雅人	全国牛乳容器環境協議会 常務理事
伊藤 忍	全国牛乳容器環境協議会 事務局長
後藤 拓志	全国牛乳容器環境協議会 顧問

プラン 2025

飲料用紙パックリサイクル行動計画

2021年4月発行

全国牛乳容器環境協議会

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-14-19 乳業会館

TEL 03-3264-3903 FAX 03-3261-9176

<http://www.yokankyo.jp>



全国牛乳容器環境協議会 = 「容環協」

「容環協」は、牛乳パックなど紙パックのリサイクルを推進している団体です。